



TITLE:

# 當代東亞人文研究者的現況與未來

AUTHOR(S):

江, 俊億

---

CITATION:

江, 俊億. 當代東亞人文研究者的現況與未來. 2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ報告論文集 2016: 219-221

ISSUE DATE:

2016-06-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215764>

RIGHT:

## 當代東亞人文研究者的現況與未來

江 俊億 (CHIANG Chun-yi) \*

京都大學南京大學社會學人類學若手ワークショップ<sup>\*</sup>(以下簡稱工作坊)自 2011 年以來,今年(2016)已是第五次集會。承蒙主辦方京都大學平田昌司老師、江田憲治老師、中山大將老師、巫靚先生、福谷彬先生與中研院文哲所陳威璠學長的好意,我有幸以論文點評人的身分,在農曆年前造訪京都並分享自己的研究關懷,實在是一次非常難得的經驗。

就個人感受而言,我認為這次工作坊有以下兩個特點:首先,主辦方不只在會中安排現場口譯,並細心地在會前準備好中文、日文版的所有稿件,更彈性變通議程,盡量讓所有參與者都能針對議題暢所欲言。這些安排對學術交流來說,無疑具有極大助益。對於主辦方的辛勞與見識,我由衷表達謝意與敬意。

其次,這次工作坊的發表論文、問題提起與討論,以及參訪長期關注環境公害再生議題的藍天財團(あおぞら財団)等,都表現出對「人」與「現實」的深刻觀察與關懷。如果進一步解釋其中意義,其實人文學科,固然可以說是以「人」為中心所展開的學問。但是在這次工作坊中,除了被研究的對象或課題以外,我們研究者本身作為「人」的價值與定位,也被積極地討論一番。

當然,我並不是說以往學者對此問題便毫無關心,而是在當下嚴苛的「現實」環境裡,人文學科研究者在思考如何探求「理想」、並將「理想」相應地實踐出來之前,或許更需要追問並重新定位:面對歷史記憶與國際情勢,不再被當前「國家」或「市民社會」直接需要的人文學科研究者,自身意義究竟何在?我覺得,在這樣的關懷裡,即使我們的研究路向或方法,與前輩學者相去不遠(如田野調查、數據整理、概念解析、理論建構等),但其中也必然帶出許多不同的思考與體會。這是我們這一代研究者必須面對且解決的問題。這可能也是綜合討論時,發言如此踴躍的原因之一吧!

從 2 月 2 日到 2 月 6 日,雖然不到五天時間,但因為在台灣現行的文史哲學科環境裡,比較少有機會與社會學、人類學或東亞區域研究的研究生們一起交流、討論,所以不論是王楠寓深意於平淡的表述方式,川軍、建坤立志振興文化和投身研究的穩健台風和樂觀態度,或是江田老師帶大家看火爐祭(惜未果)、與仕豪深夜對談、與海日、子博玩耍笑鬧,我都由此獲得許多寶貴的刺激和回憶。此外,我也再次感受到外語的重要性。在此不只特別感謝福谷先生與燕華的翻譯和口譯,餐會上,威璠學長和我一同試著透過日文,與太順、矢內等談論何謂「哲學/哲學史」與「思想/思想史」;或是坐在中山老師、顏老師身旁,靜靜地聆聽他們對兩國公務人員職等異同的討論。這次參與工作坊的師友們,都熟悉兩種以上語言,且運用自如。這都不斷提醒我,絕不可忽視外語能力,必須誠實面對才行!

最後,再次感謝中山老師、巫靚先生親切溫暖的照顧。福谷先生疲憊中還帶我參觀京大書店、中國哲學史研究室,以及走一小段哲學之道等等,實在過意不去。最感人的是,歸國當天,天未亮、寒風中,中山老師等三位先生,凌晨四點半仍親至清風會館送行。即使計程車走遠,回頭仍可望見身影。這份溫情,五內永銘!誠心希望工作坊能繼續舉辦,讓更多的東亞年輕研究者齊聚一堂,打開眼界,共同思索我們的未來!

---

\* 臺灣警察專科學校兼任講師,國立臺灣大學中國文學系博士班研究生。

## 東アジアの人文科学研究者の現状と未来

江 俊億 (CHIANG Chun-yi) \*

京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ（以下ワークショップ）は 2011 年から 2016 年の今年で既に五回目の開催となります。京都大学の平田昌司先生、江田憲治先生、中山大將先生、巫靚さん、福谷彬さんや中研院文哲所の陳威璿先輩のご厚意で、幸いにもコメンテーターのお役目を頂いて、旧暦の年末に京都に訪れ多くの研究に触れることができ、本当にこのたびはめったにない経験をさせていただいたと感じております。

自分の個人的な感想について申しますと、私はこのワークショップには以下の二つの特長があると思いました。まず、運営者は、当日の会場において通訳を手配するのみならず、会議の事前に中文・日本語版の原稿を入念に準備しており、また、プログラムをより柔軟性のあるものにし、全ての参加者が議題に対して最大限思いのままに発言できるようにしていたということです。このよう準備することは学术交流において極めて有益であることは疑うべくもなく、私は心から感謝と敬意を申し上げたいと思います。

その次に、今回のワークショップの発表論文・問題提起・討論、それから公害や再利用について長期に渡って活動している「あおぞら財団」への見学などは、いずれも「人」と「現実」への興味関心を示すものです。さらにその意義について考えますと、人文学とはもちろん「人」を中心として展開する学問と言うことができます。しかし、このワークショップでは研究対象あるいは研究課題のほかに、私たち研究者自身の「人」としての価値と立場について積極的に討論されていたと思います。

当然、私たちは以前の学者はこれらの問題に対して全く関心がなかったと言っているわけではなく、直面する過酷な現実的状况の中では、人文科学研究者はいかにして「理想」を探究するかを考えることにおいて、「理想」を実践しようとする前に、自分の新たな立場を模索し定める必要があるかも知れない、ということです。つまり、歴史の記憶と国際情勢に対して、目前の「国家」や「市民社会」に決して直接的に必要とされるわけではない人文科学研究者が、どこに自らの価値を見出すか、ということです。私はこのような関心の中で、研究方向と方法において先輩の学者たちと大きな違いがあるわけではありませんが（フィールドワーク、数値計測、概念分析、理論構築など）、ただ、その中に必然的に多くの（以前の時代の学者とは）異なる考え方、理解が出てきます。これは私たちがこの時代の研究者が必ず直面し解決しなければならない問題です。これは、総合討論の時に各々の発言が活発であった原因かも知れません。

2月2日から2月6日まで、5日ほどではありましたが、台湾の現在の文史哲学科の状況においては、社会学・人類学あるいは東アジアという枠組みで研究する研究者と一緒に交流・討論する機会は比較的少なく、王楠さんが落ち着いた語り口の中に深い意味を込められていたことは言うまでもなく、和川軍さん、柳建坤さんが文化の振興を志し、研究に身を投じる堂々としてまた楽観的な様子、また、江田先生のみなさんをお祭りに案内しようとして下さった様子（結局は見れませんでした）、また肖仕豪さんとは深夜までお話し

---

\* 台湾警察專科學校兼任講師、国立台湾大学中国文学系博士課程。

して、姜海日さんや林子博さんとも楽しくお話ししたことなど、全て私にとってはまたとない貴重な刺激と思い出となりました。この他にも私は改めて外国語の重要性を感じました。このたびは、福谷さんの素晴らしい翻訳と通訳に感謝します。晚餐においては、陳威璿先輩と私は試みに日本語を使って、羅太順さんや矢内さんたちと「哲学・哲学史」、「思想・思想史」とは何なのかについて話し、また、中山先生や顔先生の近くに座って日台の両国の公務員職の異同について話しているのを静かに聞いてみました。今回のワークショップにご参加の皆さんは皆ふたつ以上の外国語を話し、自在に運用していました。このことは決して外国語能力を疎かにしてはならず、誠実に努力してやっとなることができるようになるということを私に改めて思い出させました。

最後に中山さん巫靚さんに親切で温かくお世話して頂いたことに感謝致します。福谷さんもお疲れの中、私を京大の本屋さんや中国哲学史研究室や哲学の道などに連れて行って下さりまして、有りがたく思っております。一番感激したのは、帰国の当日、日の出前の時間で大変寒い中、中山先生たちお三方が、朝の四時半に清風会館までお見送りにいらしてくださったことでした。車がかなり進んでからも、振り返ってみますとなお姿が見えました。

こうした温かいお心遣いに、非常に感激致しました。ワークショップを継続して開催して、更に多くの東アジアの若手研究者が一堂に会し、私たちの未来をともに考える機会を得られることを心から望んでおります。

(翻訳 福谷彬)